

中田喜直の記念碑的童謡作品集『かわいいかくれんぼ』の調査研究と考察 —その美術的装丁とサトウハチローの詩に対する付曲を中心に—

宮田 (恒川) 知絵*

要約

童謡の作曲家として、また歌曲の分野においても数々の秀作を残した中田喜直の童謡処女作品集『かわいいかくれんぼ』は、戦後間もない1955年に当時としては破格に豪華な装丁で出版された。この曲集が戦後の日本の童謡界に与えた影響は極めて大きいものがあるが、現在ではその現物は僅か数大学の図書館で所蔵が確認されるのみで、既に陽の目を見ない忘れ去られた楽譜集となって推移している。この作品集について、その美術的な装丁の全貌、ならびに曲集の中のサトウハチローの詩に作曲された作品全46曲に視点をしぼり、歌詞に用いられた言葉／音楽の調性／拍子／伴奏のピアノパートの配分、それらを精査し考察を加える。当時の中田喜直の作品創作の姿勢を検証すると共に、関係者が願った「真に心の糧となる童謡」とは何かをこの全体像から探りつつ、この童謡作品集に対する我が国で初の論考を行う。

キーワード：中田喜直、かわいいかくれんぼ、サトウハチロー

2009年10月5日受理 (理論)

童謡作品集『かわいいかくれんぼ』は、数々の名作童謡を世に残した中田喜直が童謡作曲家としての第一歩を印したと言う記念すべき楽譜集にもかかわらず、出版より約半世紀以上の歳月を経た今日、原本の公的所在は極めて限られた所でしか見出すことができず、現在は殆ど人の目に触れる機会もないまま推移している。^{注1}

筆者はこの重要な楽譜集に関する詳細な調査を実施したいと考え、出版された当時の楽譜集の現物を長い期間にわたり捜していたが、近年幸運にも保存状態の良いものを落手することが出来た。そこでその内容について調査研究と考察を行う。この小論が同書の持つ価値を再認識・再評価していくための契機となり、かつ童謡関係の研究者はもとより、幼児教育関係者の方々のお役に立てれば幸いである。「かわいいかくれんぼ」は日本の音楽界に偉大な足跡を残した作曲家・中田喜直の童謡処女作品集として1955(昭和30)年

に出版された。中田はその作品集の「あとがき」において「前から計画していた私の童謡曲集がやっと出来上がりました。自分の曲集が一冊の本になる事は非常に嬉しい事です。」と開口一番その喜びをあふれるように書き始め、感激を吐露している点がまことに初々しく感じられる。『かわいいかくれんぼ』は当時、東京北区にあった「野ばら社」と言う出版社から発行されたが、戦後10年しか経たない時代のものとしては破格に豪華で美しい楽譜集であった。その表紙は濃い紫色の厚紙に横文字アルファベットのみに文字が表記され、さらにその表紙の上には美しく装丁が施されたカバー表紙がもう一度巻かれ、曲目の目次は赤と黒の二色刷り、また内部には多彩な色の紙ページにイラストが描かれる…と言う洗練された出版物として世に出された。この楽譜集はさて、当時の楽譜集としては破格に豪華な…と記したが、この点について童謡や子どものための音楽作品の分野にも数多くの秀作を発表

*大阪健康福祉短期大学
連絡先：宮田 (恒川) 知絵
〒590-0014 堺市堺区田出井町2-8
大阪健康福祉短期大学 子ども福祉学科
E-mail : c.miyata@kenko-fukushi.ac.jp

している著名な作曲家・湯山 昭も、この楽譜集との出会いの驚きを出版から30数年を経た後年の平成2年に、彼のエッセイ集の中で言及し次のように記述している。

「30数年前の出来事が鮮やかに甦ってきた。あの日はヤマハ銀座店の楽譜棚から、ずっしりと手に重たい一冊の曲集を取り出して眺めていた。紫色の表紙には可愛らしいカバーが掛けられている。カラー印刷された切紙細工の赤い風船と緑の樹。それを背景におもちゃ箱のような色とりどりの家が並ぶ。童心にみちあふれた美しい装丁。総計248ページにおよぶこの分厚い曲集は、一瞬のうちに私の心を捉えたのだった。赤のクレヨンで肉太に書かれた平仮名のタイトルは「かわいいかくれんぼ」。その下に「なかだ よしなお」と、この曲集の作曲者名が黒いクレヨンで書かれている。(中略)初めて目にした野ばら社という出版社から刊行されたこの曲集は、当時としては稀にみる豪華本だった。」^{注2}

一冊の楽譜集との出会いから30数年を経た後にも湯山の心に残った鮮烈な思い出…、この文章からも『かわいいかくれんぼ』が関係者に与えた驚きの大きさが想像できるものと思う。作曲者本人の中田も、後に自身の回顧録のような体裁で『我が音楽家への道』と題した文章をしたためているが、その中で「NHKなどから作曲の依頼が少しづつくるようになった。幼児の時間、歌のおばさんなどのために、童謡の作曲を頼まれ「かわいいかくれんぼ」「めだかの学校」などを作り、特にサトウハチロー、小林純一氏とのコンビのものが多かった。昭和30年に野ばら社が、154曲を集めて、豪華な童謡全集を出版してくれて話題になった」^{注3}と、この楽譜集出版の思い出を書き記している。

さらにそれから約20年の後になる中田の晩年に彼が執筆した自伝的書物『音楽と人生』のなかでも、やはりこの童謡集に言及し、「これは「野ばら社」の志村(城戸)洋子さんの御好意で出来たもので、完成までとても大変だったが、当時としては非常に豪華で画期的な童謡曲集といわれた。この曲集をたまたま楽器店で見て、自分も童謡を作ってみようと考え、その後すぐれた曲を沢山書くようになった作曲家が何人かいたようである。」^{注4}と回想し、中田の生涯にとっても、また童謡の作曲界においても深い意味を有した楽譜集であったことが伺える。

装丁から見た楽譜集の概要

さて前述したように、この楽譜集は当時としては破格に豪華なものであったが、湯山 昭が全体の装丁や図柄、その他へのこまやかな印象までを書き記した所以はどのような点にあったのであろうか。まずその点を検証するために、この曲集の各ページを丹念に調べていくと、曲目目次が掲載されている前のページ(ページ番号なし)の下の方に、装丁：彼末 宏と小さく記載されているのが見出せる。彼末 宏氏は、後に東京藝術大学美術学部の油彩画の教授として、多くの名作を残した美術家であり^{注5}、若き日の彼末の美術的才能による斬新な製作・装丁が加わったことにより、この曲集は中田喜直が童謡の作曲家として本格的な制作活動を開始し、それを世に問うた記念すべき一冊であったと言う点にとどまらず、“童謡は価値ある音楽作品である”との中田の信念を主張する出版物として、その作品集の装丁や編集にも芸術における美術分野との一体感を求め^{注6}、中田や関係者が力を注ぐ姿勢を表明した作品集としても、大きな意味を見出す出版物であったと言えよう。

この曲集の外観、および視覚的な面からの状況を確認するために、彼末 宏の装丁による美術的創作の内容について、検証するページを割くことは必要なことであろう。本書には通常の楽譜には見られないいくつかの美術的な装丁・製作の工夫を見出すことができるが、その特徴となる諸点を上げると以下の四点に集約できる。

1. クレヨンで描かれたようなタイトル、そして なかだよしなおと作曲家の名前がすべて平仮名で、たどたどしいような趣で記され、原色による切り紙細工のような形態で、積み木を描いたようなイラストの描かれたカヴァーの表紙が付けられていること。
2. 曲目の紹介・プログラムのページには、通常は曲番(1.2.3.…)として番号が付されるものであるが、本書には曲目番号が付されていないこと。
3. 収載された曲目は全154曲と言う多数に及び、全曲が中田喜直の作曲によるものであること。
4. 楽譜集の数箇所、表裏が全面カラーによるベタの色紙を用い、かつそのページには一定しないさまざまな箇所に、白抜きで小さなイラストが描かれた遊びのページ、が組み込まれていること。

上記の4.で示したように、楽譜集として本来は必要ではないカラーの遊びのページや、そこに描かれたイラストは何か特別な製作意図、音楽作品との関わりなどを持って編集され、挟み込みの装丁がなされたのか…を検討するため、全体のページネーションを一覧表としたものが表1である。

次にカラーの遊びページが、どれだけの曲数ごとに挿入されているのか、前後の曲のタイトルや内容との相関性はあるのか、などを調べてみると、まずカラーの遊びページは、1曲～26曲目の次、27曲目～40曲目の次、41曲目～55曲目の次、56曲目～74曲目の次、75曲目～87曲目の次、88曲目～136曲目の次、137曲目～154曲目の次と言った箇所に挿入されており、それぞれのページ間の曲数は、26曲／14曲／34曲／13曲／49曲／18曲、とその数はまちまちであり、曲数やページ数による規則正しい挿入ではなく、機械的に曲数やページ数でイラストの描かれたカラーページの組み込み、が行われたのではないことが解る。またカラーページが挟まれる前後の描かれた歌詞の内容との相関性、イラストと前後の曲目の内容とのリンクも見られず、曲目の内容や楽想とはまったく無関係な、独立したイラストが配されていることが解る。これらの点をどのように読み解くか…は種々の解釈が成立しようが、前後の曲の内容と無関係なイラストを挟んだ意図としては、彼末 宏ほどの人物なら、前後の曲の内容や次にくる曲のイメージを髣髴とさせるべく関係性を持たせたイラストを入れることの方がより簡単であり、敢えてそれを避けて、ページをめくるたびに、まるでおもちゃ箱を次々と開けていくような、いつ、何が、現れるか分からない…と言った楽しみや驚き、新鮮さを意図したものと考えるのが妥当であろう。これらの諸点から考察するに、子どもの持つ夢や空想・ファンタジーを、驚きとワクワクするような装丁に仕上げることの方がより創造的であり、彼末のイラストは中田と同じく、童心こそが童謡の主人公である、との主張をきわめて寡黙に描いたもの、と受け止めるのが適切であろうと考えられる。

『かわいいかくれんぼ』に収載された詩人、サトウハチローの用語

この曲集は、第一曲が曲集のタイトルとなった「かわいいかくれんぼ」からはじまり、最終曲の「音楽ばさみ」まで全154曲の童謡が収載されている。作詞家

は一瞥してサトウ ハチローと小林純一が多くを占め、それぞれ46曲と47曲になっている。その他としては佐藤義美と葛原しげる作品が6曲、結城ふじお作品が5曲、それ以外の作詞家作品は1から3曲とわずかな作品数となっており、計39人の詩人による作品に中田が154曲の音楽を作曲した曲集である。サトウと並び小林純一の詩に対する作曲が多いのは、中田がNHKで幼児の時間のリズム遊びと言う番組の音楽制作に小林純一とともに関わっていたことによる^{注7}。

本論ではサトウハチローの詩に関してそのタイトルと詠み込まれた詩の内容を調査するために、各詩に歌い込まれた登場人物（生き物）や、名詞、子どもを取り巻く色々なモノたちを精査し、いくつかの主要な語句を項目別に分類し拾い上げてみたのが表2である。（各語の後ろに付した番号は楽譜集に打たれたものでなく、筆者が便宜上本論のために曲番号として加えたものである）

こうして『かわいいかくれんぼ』に掲載された童謡のうち、サトウハチローの詩全46作品を精査してみると、表2に示した語句の拾い上げ作業により明らかになるように、この曲集で用いられた詩には、動物や生き物などを表す言葉の使用が圧倒的に多く、そのすべての語句が子どもの生活、そして子どもの遊び、子どもの視線や関心の中に存在する言葉であることがわかる。さらにこれらに分類される言葉の中には、愛称（ごんろくさん、さぶちゃん、ちゅうすけどん…など）や、子どもをとりまく日常生活の場で見られる生き物たちへの、人間と同一視した愛着ある言葉（かえるのかあさん、つばめの子、子ぎつねさん…など）が網羅されていると言う特徴も見出すことができる。サトウハチローの童謡を「伝統的な花鳥風詠ではなく、子どもたちの暮らしの諸相がぐだけた話し言葉であざやかに歌われており、やや古風なペーソスと絵画的イメージに特徴がある」と集約した畑中圭一の指摘^{注8}は、これらの精査からも十分に再確認することができる。

サトウ ハチローの詩に作曲された童謡、その音楽的概要の調査

鎌倉女子大学の薩摩林淑子は中田喜直の作品研究の一環として2001年にヤン・ラルーの提唱した「スタイル・アナリシス（総合的様式分析）」^{注9}の手法に従って、中田喜直の童謡集『わらいかわせみにはなすなよ 子どもの歌曲集』（フレーベル館）に収載された作

表 1

ページ	カラー表頁の地色	描かれたイラスト	カラー裏頁の地色	描かれたイラスト
表紙裏	サーモンピンク系	柵木、山羊	ぶどう色系	鳥
表紙の次頁	若草色（薄緑）系	Nの装飾	黄色系	なし
p.56~57.	ローズピンク色系	子どもの楽隊	若草色（薄緑）系	木の葉
p.72~73.	濃い紫色系	風見鶏と屋根	ブルー色系	燭台とろうそく
p.120~121.	薄い黄色系	四人の子どものダンス	ピンク色系	サーベル あぶみ付の長靴
p.136~137.	若草色系	時計の文字盤の一部	濃い紫色系	小太鼓とラッパ
p.216~217.	薄い紺色系	二人の子どもダンス	薄い黄色系	アラビア風のお城
裏表紙の表	濃い紫色系	船とイカ	ローズピンク色系	一つ星

表 2

<p>天体・自然・気象など・・・計 17 語(回) 雨・虹(19)雪(20)こなゆき(24)青空(25)雪風(28)あめ・にじ・つゆ(29)青空(30)かげろう(31)風(32)ゆき(36) 日暮れ・夜(38)空(39)夕月(45)</p> <p>おもちゃ・衣服・あそびなど・・・計 28 語(回) おはなし(3)そり(8)おべべ・たこあげ(11)おやつ(15)おべべ(20)ままごと・おうた・あかんべ(23)おべべ・ シャツ・ももひき・はおり・あんごら毛糸・頭巾・えりまき・てぶくろ・耳ぶくろ・ふとん(28)シャツ・ 貝がらぼたん・なわとび(32)笹ぶね・うばぐるま・輪なげ・浮きぶくろ・貝がらボタン・いしけり(35)</p> <p>動物・生き物など・・・計 83 語(回) ひよこ・すずめ・子犬(1)もぐら(2)もんしろ蝶々(3)象・わんわんちゃん・うさちゃん・ぶた(4)かあさん 牛・とうさん牛・おばさん牛・ちょうちょ(5)おじいさん・おばあさん(6)かなかなぜみ・ひよこ・めだか・ こねこ・かあさん(7)サンタクロース・かあさん・とうさん・あかちゃん・ぼあやちゃん(8)おじさん・ト コヤのおばさん・パンヤのおじさん(9)誰かさん・子馬・子やぎ・もんしろちょう・黄金虫(10)鳥の親子・雀 の子・たぬきのおじさん・オーム(11)金魚・でめきん・おばさん・めだか(12)にいちゃん・こおろぎ・み みず・おけら・ごろすけ・坊主(13)たぬき・ばあさん・じいさん・ぼうや・リス・子リス(14)小鳥・子豚・つば め・お馬・みみずく・たぬき・子リス・ブルドック・もぐら・雀・ひばり・あひる(15)むぎわらとんぼ(16) こすずめ・かあさんすずめ(17)小鳥・おじい(18)みみずくおばさん・かえるのぼうや・かえるのかあさ ん・かめのこじいさん・おはぐろとんぼ(19)サンタクロース(20)そっちの子・こっちの子・おだんご屋(21) たぬきのぼうや・わらいかわせみ・キリン・おばさん・象さん・おじさん(22)あかちゃん・とうさん(23) ねずみ・雪兎・やぎの子・こども・熊さん・お友達(24)赤ちゃんつばめ・兄弟(25)ともだち・いっちゃん ・じろくん・さぶちゃん・四ゲぼう・ごろちゃん・ろくんぼ・ななちん・やっちゃん・きゅうどん(26) ごんろくさん・いのしし・とんべいさん・たぬき・子だぬき・だんすけ(27)さむがり坊主(28)かえる・ かまきり・かぶとむし・かまきりむし・みんなんぜみ(29)鯰・小鳥・鮎・どじょう・蛙・手長海老・緋鯉・ 真鯉・小鳥(30)ぼくら・ともだち(31)はね虫(32)ねずみ・ちゅうすけどん・もぐら・パン屋・ろばさん・ うさぎ・やぎの子・ぶたさん・ひよこ・めんどり・とんび・みみずくおじさん(34)おたまじやくし・チ ビ助(35)たぬき・たぬ六さん・こぎつねさん・こん七・あなぐま・りすの子・うさ八さん・やまねこ・ ニャアスケ(36)かばのかあさん・さいのおばさん・つるのとうさん(37)かあさんのまつげ(38)つばめ の子・あかちゃんつばめ(39)坊や(40)ばあや・わたし(41)かあさん・とうさん・あかちゃん・おばさん・子 犬・ムク・おじさん(42)子豚・おかめいんこ・からすのじいさん・蜂・あひるのおばさん・狸・三羽の ひよこ(43)ぼくら・ろば・山羊・ひばり・子蟹・黒猫・カラス猫(45)</p>
--

品を精査し、その労作の成果を論文として発表した注10。薩摩林が調査対象とした楽譜集『わらいかわせみにはなすなよ』は、1965（昭和40）年に出版された中田の作品集であり、筆者が今回取り上げた『かわいいかくれんぼ』は、その出版より10年先立つ1955（昭和30）年の作品集である点からも、本論で調査する対象は、中田のデビュー作とも言える重要な楽譜集へのアプローチと言えよう。本論では、『かわいいかくれんぼ』の中でのサトウハチローの詩に付曲された童謡、全46曲を異なった視点から外観調査と考察を行うが、サトウハチローと中田との出会いのきっかけは、著名な音楽評論家であり戦後間もない時代に、NHKのラジオでクラシック音楽を組織的に紹介する番組「音楽の泉」^{注11}で昭和24年9月から昭和32年3月まで約7年半、385回と言う長期にわたって解説と放送を担当した日本音楽界の長老、堀内敬三の紹介によるものであったことを付言しておきたい。

さて、音楽学校を卒業し新進の作曲家として活動を開始した中田は、作曲家グループ新声会^{注12}に参加し、優れた音楽家たちと関わりを持ちながら、昭和22年7月の「新声会・第五回試演会」で発表した日本歌曲集「六つの子どもの歌」により、優れた日本歌曲の作曲家として注目を集めることとなった^{注13}。この作品は現在でも声楽家たちにとって重要なレパートリーの位置を占めている。そのような活動の一方で、中田は今度はNHKなどとの関わりの中で、サトウハチローや小林純一との出会いを得て、歌曲の作曲家としても、また童謡の作曲家としても大きな足跡を残す歴史の一步を歩み出すこととなるのである。

本論で取り上げる全46曲の内、ピアノパートだけによる部分、すなわち前奏／間奏（または繰り返し時に間奏としての役割を担う部分を含む）／後奏はどのような配分で作られているか、また拍子、調性、発想用語などの概観の全貌を調査し一覧にしたものが表3である。

前奏については、表3に掲載しなかったが、全46曲（1～46）すべての作品が何らかの前奏を有しており、その前奏の小節数と曲数においては以下のような違いがある。

- ・ 1小節の前奏を有するものは1曲のみ（42番）
- ・ 2小節の前奏を有するものは全25曲
（4/6/7/9/13/15/16/20/21/26/27/29/30/31/32/33/35/
36/38/39/40/

41/43/45/46番）

- ・ 3小節の前奏を有するものは全3曲（12/25/28番）
- ・ 4小節の前奏を有するものは全13曲
（1/2/3/8/10/14/17/19/22/23/34/37/44番）
- ・ 5小節の前奏を有するものは1曲のみ（5番）
- ・ 6小節の前奏を有するものは1曲のみ（24番）
- ・ 8小節の前奏を有するものは全2曲（11/18番）

このような配分となっており、全46曲中、2小節の前奏を持つ曲が54%で最も多く、続いて4小節の前奏を持つ曲が28%を占めている。これらは音楽における拍子形成の安定に最も小さい最小単位となる2小節と、音楽上の節と呼ばれる4小節、を持たせた安定型の前奏、この二つの分かりやすい前奏で構成された作品で併せて82%の曲が作曲されていることが解る。また奇数小節となる1・3・5と言う小節数の曲も、それぞれ1曲ずつ作られており、それらを検証すると、1小節の前奏を備えた第42番の曲「ぼうやの算数」では、唯一ソの音（G）一つだけで書かれた独特な前奏が作曲され、それはまさに数を数える算数の緊迫感のようなものを譜例①に示したように導き出しているし、ただ1曲となる5小節の前奏を有する第5番の「べこの子うしの子」では、譜例②のごとく実際は3小節の前奏プラス2小節の歌のメロディーを導入するための前奏、と言った工夫が凝らされていることが解る。

譜例①「ぼうやの算数」



譜例②「べこの子うしの子」

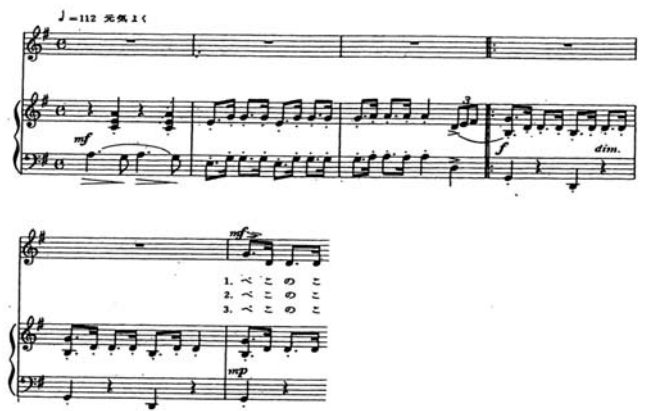


表 3

曲 名	拍子	調 性	間/後奏	発想標語
1.かわいいかくれんぼ	2/4	へ長調	無/有	可愛らしく
2.シャベルでホイ	2/4	ト長調 五音音階	有/有	威勢よく
3.もんしろ蝶々のゆうびん屋さん	4/4	ホ長調	有/有	元気に
4.お月さんと坊や	2/2	ホ短調・ホ長調	有/有	落ち着いた感じで
5.べこの子うしの子	4/4	ト長調 五音音階	有/有	元気よく
6.こんこんこんやも	4/4	ハ短調	無/有	急がぬ様に、こわそうに
7.夕方のおかあさん	4/4	へ長調 五音音階	有/有	割合 落ち着いた感じで
8.サンタクロースは不思議だな	2/4	ハ長調 五音音階	有/有	
9.モショモショフムフム	4/4	へ長調	有/有	元気よく
10.誰かさんの頭に	2/4	ト長調 五音音階	有/有	
11.お正月さんが笑った	2/4	変口長調	有/有	少しおどけて可愛らしく
12.金魚きんとと	4/4	ト長調 五音音階	無/有	
13.にいちちゃん何かがないてるね	4/4	ニ長調 五音音階	有/有	話しかける様に可愛らしく
14.どっこいしょどっこいしょ	2/4	へ長調 五音音階	有/有	ゆっくり 歩く様に
15.ポロッ ポロッ ポの歌	4/4	へ長調	有/有	元気よく
16.夏です	4/4	変口長調 五音音階	有/有	
17.るすばんすずめ	2/4	ト長調 五音音階	有/有	
18.今日も鳴らそか	2/4	へ長調 五音音階	無/有	
19.でたでた虹が	4/4	ニ長調	無/有	
20.どうして叱られないの	4/4	ト短調 五音音階	有/有	不思議そうに
21.そっちの子とこっちの子	4/4	ト長調 五音音階	有/有	
22.わらいかわせみに話すなよ	2/4	ハ長調 五音音階	有/有	
23.ままごとあそび	4/4	イ長調 五音音階	有/有	
24.おめでとうの歌	4/4	ト長調	有/有	元気よく
25.あかちゃんつばめ	4/4	ハ長調 五音音階	有/有	
26.とんとんともだち	4/4	ホ長調	有/有	元気よく
27.ハテハテハテナ	4/4	変口長調 五音音階	無/有	
28.さむがり坊主	2/4	ホ長調 五音音階	無/無	
29.にじがでた	2/4	へ長調 五音音階	有/有	
30.何だろ誰だろ	4/4	へ長調	無/無	
31.おともだち	4/4	ニ長調 五音音階	有/有	
32.おはなのあたまをちょっとぬらし	4/4	変ホ長調	有/有	
33.かどまつたてよか	4/4	ハ長調 五音音階	無/有	おどけて
34.右むきヤワンワン	4/4	ニ長調	有/有	元気よく
35.おたまじゃくしに	2/4	変ホ長調 五音音階	有/有	可愛らしく
36.たんたんたぬきのため六さん	4/4	ト長調 五音音階	有/有	
37.かばのかあさん おのどがいたい	4/4	へ長調 五音音階	有/有	こっけいに おどけて
38.おせんこ花火	4/4	ト長調 五音音階	有/有	元気に
39.鯉のぼりさんは何をみた	4/4	ホ長調	無/有	元気よく
40.ずらりずらり	4/4	へ長調 五音音階	無/有	
41.ばアやお里	4/4	ニ長調	有/有	
42.ぼうやの算数	4/4	ハ長調 五音音階	有/有	
43.コロコロ子豚	4/4	へ長調	有/有	
44.一年生の歌	4/4	ハ長調	無/無	元気で
45.まっくろ黒猫カラス猫	4/4	ニ長調 口長調	有/有	
46.おせんこはなび	4/4	へ長調	有/有	

同じくただ1曲となる6小節の前奏を備えた第24番の「おめでとこの歌」では、譜例③に示したように、まるで祝祭気分のファンファーレのような2小節と、続いて加えられた歌い出しの歌のリズムを用意する2

譜例③「おめでとこの歌」

小節の合体形、と言う構成の工夫が凝らされており、中田の童謡創作における前奏部分での巧みで周な態度がはっきりと伺えると言えよう。

次に間奏（または繰り返し時に間奏の役割を果たせる部分を有するもの）と、後奏の作曲型についての分布と、その音楽的内容に関して考察を進める。まず間奏について調べると、

- ・間奏がまったく用意されないものは全11曲 (1/6/12/18/19/27/28/30/39/40/44/番)
 - ・1小節の間奏を有するものは全10曲 (11/15/20/21/22/23/25/32/41/42番)
 - ・2小節の間奏を有するものは全20曲 (2/4/5/7/9/10/13/16/17/26/29/31/33/35/36/37/38/43/45/46番)
 - ・3小節の間奏を有するものは全1曲 (34番、但しこれは楽譜の誤植の可能性があり、5小節の演奏になる可能性を有する)
 - ・4小節の間奏を有するものは全4曲 (3/8/14/24番)
- となり、全46曲中2小節の間奏を有する作品がほぼ半数の43%、続いてまったく間奏を持たない作品が24%、そして短い1小節の間奏を有するものが21%である。何らかの間奏を有する作品は計35曲であり、これらで計76%の多数を占めている。3小節(5?)または4小節の間奏を有するものは、併せてもわずか5曲であり、それらは例えば第34曲の「右むきゃワンワン」では、譜例④に見られるように、前奏の冒頭2小節が、

譜例④「右むきゃワンワン」

犬・猫・天井のねずみ・めんどり・とんび、などの声象徴する音型で開始され、続いて歌い出しのリズムを導く導入句による前奏。そして歌の最後の言葉「こんにちは」の音型が、ピアノにより反進行形で単純化された間奏1小節（これは動物たちの「こんにちは」へのお返事となる音楽上のモチーフとみなされる）でリピートされる。このように中田は間奏の創作において、極めて効果的かつ必要最小限の間奏で、音楽の密度を維持していることが解る。

- 最後に後奏についても調査をしてみると、
- ・まったく後奏を持たないものは全3曲 (28/30/44番)
 - ・1小節の後奏を有するものは全13曲 (4/8/11/12/20/23/31/32/34/36/37/42/45番)
 - ・2小節の後奏を有するものは全21曲 (2/5/6/7/9/13/15/16/17/21/22/25/26/27/29/35/38/39/40/43/46)
 - ・3小節の後奏を有するものは全1曲 (41番)
 - ・4小節の後奏を有するものは全5曲 (1/10/14/18/24/番)
 - ・5小節の後奏を有するものは全2曲 (3/19番)
 - ・6小節の後奏を有するものは全1曲 (33番)
- となり、最も多いのが2小節の後奏を持つ曲で45%、続いて簡素な1小節の後奏の曲が28%、4小節の曲が11%、このように計84%の楽曲が後奏を擁している。子どもたちの歌う童謡に対して、歌の終了がその曲の音楽の終りではなく、2小節や1小節と言う簡素な構えでも作品の中の音楽の完成に余韻を持たせたい、と考える中田の想いがこの数字から読み取れる。後奏で特異な小節数、3小節の後奏、を示すわずか1曲しか見られない作品について考察を行うと、その作品、第

33番「ばあやのお里」では、譜例⑤のように、独立した音楽的主題による前奏2小節のオクターブ上方のモチーフの借用に加え、静かな空間が付加されたような1小節が付けられ、ばあやのお里でおとまりをする子ども、そして、ばあやに「唄つて、なぜられて、こみあげた」子どもの情感がppの和音でシーンと静まった音空間として書き留められている。

譜例⑤「ばあやのお里」



41番「かどまつたてよか」の曲では、お正月の門松を準備するために、子どもたちが「…西山・チクチク小山・北山・サヤサヤ小藪…」に門松の材料を探しに行き、それらを持ち帰ってワクワクしながら門松作りをする時間の経過と楽しみを、譜例⑥のように音量の変化と長い6小節の後奏で、想いを引きずるように書き付けられている。

譜例⑥「かどまつたてよか」



ここまでの調査で、サトウハチローの詩に付曲した中田の童謡作品では、ピアノの前奏／間奏／後奏の配分型は次の図式のもの、最も典型的な作品であることが判明する。

前奏2小節（54%）＋間奏2小節（43%）＋後奏2小節（45%）

なお、拍子については4分の4拍子の曲が圧倒的に多く、全33曲、約72%の曲がこの拍子によって書かれている。3拍子を持つ曲は1曲も見当たらず、これは国文学者の別宮が指摘するように、日本語のリズムが四拍子文化に裏打ちされていること^{注14}と無縁ではあ

るまい。

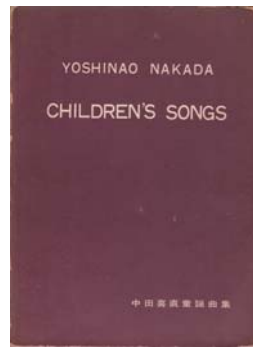
また特筆すべきこととして、ピアノパートは別として、歌を構成するメロディーラインでは、日本のわらべ歌などに多く見られる五音音階で構成されている曲が全27曲見られ、これは約半数以上の59%に達している。このことは、歌を支えるピアノパートに豊かな西洋音楽の和声を盛り込み、歌の部分では懐かしいわらべ歌のおもかげを残した簡素で歌いやすいメロディーを多用していると言えよう。しかしこのことは、一方では歌のメロディーラインの旋法に五音音階への偏りが見られ、子どもたちの音楽的感性の拡大…と言う点からは、現代的な広がりにはやや物足りなさを感じるとも言えよう。

最後に

ここまで先の太平洋戦争後わずか10年と言う時期に、画期的に豪華な装丁で出版され、かつそれが中田の童謡作曲家としての位置付けにも不動の一步となった作品集『かわいいかくれんぼ』について、その装丁や楽曲の概観、詩と音楽などを調査・分析し考察を加え、これまで知られていなかった同書に見る数々の中田の創作手法を述べてきた。今より半世紀以上前の作品集であるために、現在の子どもたちを取り巻く社会のありさまと風物、生活の道具や遊具、見るもの、聞こえるもの、などに大きな変化が生じており、童謡に登場する言葉のいくつか（例えば、おべべ、紋つき姿、酒かい、鯰、むぎわらとんぼ、手長海老、ばあやのお里、等）は現代の子どもたちにとって親近感の乏しい言葉となっている点は否めない。しかし多くの民話や日本の昔話は、その殆どが用語すら不明な非現実のお伽噺の言葉で語られるのが通常であるから、言葉の親近感を第一の優先度とすれば、語り継ぎたい日本の文化としてのお伽噺や民話すら伝承されないことになってしまう。この問題は文部省唱歌と呼ばれる多くの美しい歌の数々も、その歌詞がもう既に現代の日本の風景ではない…との短絡的な理由で歌われなくなったり、子どもたちに伝える努力を捨て去る風潮があるのと類似している。果たしてプラモデルの戦闘戦士や、コンピュータゲームだけで、子どもたちの情操や豊かなファンタジーを育めるのであろうか。こう考えれば、この作品集の中にも、童心に寄り添い、その眼差しや想像力の広がり豊かな支援となる極めて優れた童謡がまだま



カヴァー 表紙



楽譜表紙



表紙裏の左ページ



表紙裏の右ページ



表紙の次ページ



表紙の次の裏ページ



p. 56 から 57 表ページ



p. 56 から 57 裏ページ



p. 72 から 73 表ページ



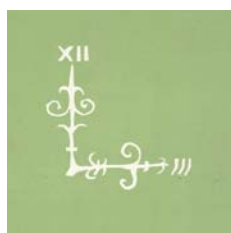
p. 72. から 73 裏ページ



p. 120 から 121 表ページ



p. 120 から 121 裏ページ



p. 136 から 137 表ページ



p. 136 から 137 裏ページ



p. 216 から 217 表ページ



p. 216 から 217 裏ページ



裏表紙の右ページ

カラーページの装丁一覧

だ多数眠っていると言わざるを得ない。今回の研究をとりまとめるに当たり、国立国会図書館や多数の大学図書館、また多くの研究者の諸氏から貴重な資料のご提供を戴いた。本論で調査・研究した童謡曲集『かわいいかくれんぼ』は、中田喜直の童謡作曲家としての処女作品集であるのみならず、日本のその後の童謡界に与えた影響と、童謡に対する概念の変革に対しても大きな意味を持った重要な作品集とみなされるが、既に冒頭に記したように、その所在は日本の極めて限られた大学図書館などに収蔵されているのみで、幼稚園や保育園の現場関係者の目に触れることは望めず、復刻される可能性も商業ペースの観点からは望み得ない^{注15}。この美しい楽譜集が極めて限られた少数の大学図書館で死蔵されて行くことなく、せめて保育士や幼稚園教員養成課程に携わる関係者の間でだけでも、中田喜直と当時の関係者が願った「真に心の糧となる童謡とは何か」をもう一度問いかける作品集として、その中に託された不朽の精神が再評価されて行くことを願うものである。

注

1. 同書は現在、大学や公共図書館の相互利用制度による蔵書検索 NACSIS Webcat では、わずか東京藝大、徳島大学、常葉短大、鶴見大学、神戸市立図書館の5館でしか所蔵が確認されない状況となっている。
2. 湯山 昭、平成2年『ポロネーズまよねーず』東京音楽社 pp.73～74。
3. 中田喜直、1976。「我が音楽家への道」『音楽の友』第34巻 第9号 音楽之友社 p.181。
4. 中田喜直、1994。『音楽と人生』音楽之友社 p.40。
5. 彼末宏は1927年生まれ、1952年に東京美術学校を卒業、後に東京藝術大学教授として活躍。中田とは東京美術学校（芸大）時代の先輩・後輩として親交を結んだものと思われる。
6. 中田喜直、1994。『音楽と人生』音楽之友社 p. 45. ここで中田は「童謡の世界を単に子どものための歌、と狭く考えず、大人の歌曲、他の芸術とも深くつながっている、ということを考えてゆきたいと思っている。」とまで言い切っている。
7. 中田喜直『かわいいかくれんぼ』あとがきで、中田自身の言葉により「小林純一さんのものが多いのは、

大部分がNHKで、幼児の時間のリズム遊びと云う番組を三年程続けていた結果の作品で、出来るだけ簡単な言葉で、幼児にリズムの遊戯をさせるためのものです。」と記述されている。

8. 畑中圭一、2007。『日本の童謡 誕生から90年の歴史』pp.283~285。畑中は国際児童文学館総括専門官や名古屋明德短期大学教授を務め、童謡史に深い研究を残した。その畑中は同時に、サトウハチローの詩作の魅力として、近代詩の感覚を古風な感傷に組み合わせる巧みさ、をも指摘している。
9. ヤン・ラルー、大宮眞琴、1988。『スタイル・アナリシス1. 2. 総合的様式分析—方法と範例』音楽之友社
10. 薩摩林淑子、2001。「原著論文 中田喜直の童謡作品におけるピアノパートの書法—サトウ・ハチローの詩による作品を中心に」『鎌倉女子大学紀要第8号』pp.9～8。
11. この放送の内容は、その後放送番組と同名の書籍『音楽の泉』音楽之友社刊として昭和28年10月より出版され、それは全6巻におよんでいる。この番組は戦後間もないわが国への西洋クラシック音楽のまとまった紹介として、画期的な内容を持ったものであり、筆者はその全巻オリジナルを所蔵しており、これらをつぶさに精読すると、戦後の日本にクラシック音楽が紹介された歴史と、それを聴く人々の喜びが伝わってくるような感覚に包まれる。
12. 新声会は、柴田南雄、別宮貞雄、石桁真礼生などによる新たな日本音楽を探求しようと言う意欲的なグループであった。
13. 組曲「六つの子どもの歌」は日本歌曲に新しい方向を示すものとして高い評価を得たことや、会場に来ていた川端康成が賞賛したことなどが『夏が来れば思い出す—評伝 中田喜直』の pp.83～88. に紹介されている。
14. 別宮貞徳、昭和52年『日本語のリズム』講談社現代新書 講談社 別宮は多くの日本語のテキストを、多数の人々に声に出して読ませ、その読み方から、字数ではなく任意の適切な休止を挟んで四拍子に読み取る、のが日本文化であると論じた。
15. 同書はその後1962（昭和37）年に増補改定版が出されたが、そこではカラーのページが割愛されるなど、美術的装丁に変化があり、初版の雰囲気は失われている。筆者は初版と共に所蔵。

引用文献

中田喜直、1994.『音楽と人生』音楽之友社
中田喜直、昭和30年『かわいいかくれんぼ』野ばら社
中田喜直、1976.「我が音楽家への道3」『音楽の友』第34巻第9号
別宮貞徳、昭和52年『日本語のリズム』講談社現代新書 講談社
畑中圭一、2007.『日本の童謡 誕生から90年の歩み』平凡社
牛山 剛、2009.『夏がくれば思い出す－評伝 中田喜直』新潮社

参考文献

1. 中田喜直、1955.「私の童謡雑記帳」『音楽芸術／第13巻』音楽之友社
2. 中田喜直、1959.「音楽批評への疑問」『音楽芸術／第17巻』音楽之友社
3. 中田喜直、1969.「日本人とピアノ－技術的な根本問題について」『音楽芸術／第27巻』
4. 中田喜直、1967.「我が音楽家への道1」『音楽の友』第34巻第7号
5. 中田喜直、1976.「我が音楽家への道2」『音楽の友』第34巻第8号
6. 中田喜直、昭和35年「メロディーの作り方」音楽之友社
7. 小林純一・中田喜直、1954.「歌詞とメロディー」『教育音楽第9号』音楽之友社
8. 丹羽正明、1960.「中田喜直（作曲家訪問）」『音楽芸術／第18巻』音楽之友社
9. サトウハチロー、1977.「サトウハチロー童謡集」弥生書房
10. 笹森 誠、2004.「童謡による中田喜直の作品の特色について」『青森明の星短期大学紀要第30号』
11. 川上 晃、2008.「中田喜直の「六つの子供の歌」」『群馬大学教育学部紀要・芸術・技術・体育・生活科学編43』.
12. 薩摩林淑子、2001.「中田喜直の童謡作品におけるピアノパートの書法－サトウハチローの詩による作品を中心に」『鎌倉女子大学紀要第8号』
13. 薩摩林淑子、2003.「中田喜直の童謡歌曲集『ほしとたんぼぼ』におけるピアノパートの書法」『鎌倉女子大学紀要第10号』
14. 薩摩林淑子、2005.「中田喜直の歌曲集『こどものための8つのうた』における音楽的特質」『鎌倉女子大学紀要第12号』

15. 大野恵美、2001.「中田喜直“童謡の世界”」『湘北短期大学紀要第22号』
16. 高牧恵理、2003.「金子みすずの詩による中田喜直の童謡歌曲集について」『幼児教育研究集録第25号』武蔵野女子大学幼児教育学会
17. 堀内敬三、昭和28年『音楽の泉』音楽之友社
18. 由井龍三、2005.『懐メロ心の風景』春秋社
19. 藤田圭雄、昭和52年『解題戦後日本童謡年表』東京書籍
20. 別宮貞徳、昭和52年『日本語のリズム』講談社現代新書 講談社
21. ヤン・ラルー／大宮眞琴・共著、昭和63年『スタイル・アナリシス 総合的様式分析－方法と範例』音楽之友社
- 22.『国文学』平成16年第49巻第3号「日本の童謡」学燈社
23. 土肥みゆき、1988.『中田喜直 歌曲の世界』アップル印刷所
24. 細川周平監修、2008.『日本の作曲家－近現代童謡人名事典』日本アソシエーツ
25. 岡村 弘、平成13年『国際比較・幼児音楽論』創言社

A Research and Study on “Kawaii Kakurenbo” , Monumental Collected Works of Nursery Rhyme by Yoshinao Nakada: in Association with the Artistic Book Design and the Characteristics in Melodising for the Poems by Hachiro Sato as the Main Theme

Chie (Tsunekawa) Miyata*

Abstract

In the year 1955, “Kawaii Kakurenbo” was published with an extraordinarily luxurious book design against the current of that early postwar period. It was the first collected works of nursery rhymes by Yoshinao Nakada, who composed many excellent nursery rhymes and lieder all his life.

Despite the significant influence by the opus on the postwar nursery rhyme world in Japan, the originals are at present to be found merely on the list of only a few college libraries, and they have never been reprinted and eventually become a forgotten collection of scores.

Also, by seeking from an overview of the opus the answer for the question of what “the nursery rhymes as food for the soul” is, as wished for by all the people concerned, along with the study on Yoshinao Nakada’s attitude toward the creation of works in those days, the author conducts herewith the first study in Japan on the collected works of nursery rhyme.

Keywords: Yoshinao Nakada, “kawaii Kakurenbo” , Hachiro Satou

*Osaka College of Social Health and Welfare
Contact Address:
〒590-0014 8-2 Tadei-Cho,Sakai-Ku,Sakai City,Osaka
Osaka College of Social Health and Welfare
Department of Child Care and Education
E-mail : c.miyata@kenko-fukushi.ac.jp